



大久保 香弥 (おおくぼ かや) 第六中 3年生

作品名: 自信を持って叫ぶ

図 書: 明日につづくリズム

自分のやりたいことはこれではない、私は将来について考えるたびにそう思っていました。

中学三年生になり、部活を引退すると進路や将来について考える機会が多くなりました。しかし、友達が将来の夢を口にする中、私はまだ将来の夢を決めることができず、焦り、自分だけが取り残されたように思っていました。興味のある仕事はいくつかありました。けれども、それを自分を重ねて考えることができず、自分のやりたいことはこれではないと諦め続けてきました。

この本の主人公の千波もそうでした。なにかをはじめたくて、うずうずする。だけどその何かはまだぼやぼやとしていて形を成さないもので、これだ！と口に出して言えるようなものではない。それなのにじっとしてられないほどの焦燥感はいいのか、いいのか、このままで」と千波をせき立てる。妹の借りてきた本を何気なく読んでいた時に飛び込んできたこの言葉に私はドキリとしました。いつまでもスタートラインで立ちつくしてなにもできないでいる、興味のある仕事があっても一歩が踏み出せず、将来について悩んでいる千波がまるで今の自分のようだと思いました。そして、そんな千波がどのようにして夢を決めるのか知りたいと思いました。

千波は文学に興味がありました。しかし、自分には大きすぎる夢だと思い、やりたいと思いながらも諦めていました。しかし、親友の環境は厳しくても、いつか絶対に夢をかなえる、という言葉に、自分が夢から逃げていたのだと気付きました。

空っぽかもしれない自分を見つめ、それを受け入れることはきっと誰にとっても難しいことだと思います。私もそうでした。やりたいと思うことはあるはずなのに、それを夢として口に出すのは恥ずかしいと臆病になっていました。周りからのヒントを頼りに自分では考えず、成り行きで決まるのではないかとさえ思っていました。しかし、それは自分の夢から逃げていただけでした。自分のやりたいことはこれではない、と思っていたのは、本当は空っぽかもしれない自分を見つめることから逃げて、憧れをかけたいいものにしておきたかっただけなのだと思います。

スタートラインで立ちつくしてなにもできないでいる自分は、何もできないのではなく、しようとしていなかったただけなのだと、この本を読んで気付かされました。この本の最後、千波が気付いたことは、

「はずかしがるな。叫んでみ。自信を持っていけ。胸をはれ。」

でした。私が将来の夢を決めることができなかつたのは自分を見つめ、認めることができなかつたために、夢から逃げていたからです。

将来の夢を決めるということが人生の分岐点の一つなのだと思います。ここで自分と向き合うことから逃げたら、きっと私はこれからもずっと逃げることになったと思います。自分と向き合うことから逃げて、夢に向かって進むことを諦めてしまうより、少しの勇気を持って自分と向き合い、夢のために自分から行動しようと思いました。

私はこれから色々な人と出会い、様々な体験をしたいと思います。悩んだり、苦しんだりもして、その中で人生の岐路に立たされることも少なくないはずですが、自分の人生の岐路をどのように進むかは自分で決めなければいけません。これだ！と自信を持って叫べるようなやり方が見つけられるように、私はもう自分と向き合うことから逃げないようにしたいです。